



松山支部だより

中途半端

「中途半端」という言葉に、何をイメージするだろうか。おそらく誰もあまり良い意味でこの言葉は使わないという気がする。程度の差に濃淡は有るだろう。私自身は、自己否定の激しさを象徴するかのごとく、この言葉を意識してきた。「何をやっても私は中途半端」と。

信念を持ち過ぎる怖さにも、鈍感にはなれなかった。キリスト教とイスラムの原理主義者の信念の堅さは、違うものを否定し受け入れない。ぶつかったときの衝突の回避のしようが無い。宗教や戦争のような大事件でなくとも、日常の中で柔軟性を失うのはよくない。そう思うから、中途半端な自分を否定しつつも、肯定してしまう。文字どおりの中途半端さ！

こんなグチは、文系特有のもので理系には関係ないと思いこんでいたので『生物と無生物のあいだ』（福岡伸一著 講談社新書）を読んで、面白いなということに突き当たった。

この本は「結局、私たちが明らかにできたことは、生命を機械的に、操作的に扱うことの不可能性だったのである」というしごく当たり前の結論でしめくられる。が、そこに至るいくつかの科学実験やデータ、それにまつわる歴史背景には、血の通った人間ドラマが有り、不得意分野として切り離してしまうのは勿体ない、と気づかされもした。

ノックアウトマウスという、遺伝子XとYを橋渡しするプリオンタンパク質の除去された特別なマウスが、どのような障害を発達のどの段階からきたすのかの実験は、思わず息を呑んだ。スリラーを読んでいるみたいだった。

緻密な経過観察の結果は、なんの障害も起きないという不思議なもの。逆に、頭3分の1を失ったプリオンタンパク質のマウスは、異常をきたしたという。3分の2有れば何とか補いが付くが、ゼロでは異常をきたすに違いないとの、常識的な予想は覆された、という訳だ。

ノックアウトマウスの場合はSOS信号がバックアップシステムの援用を求めXとYをつなぎ得る何らかのバイパス経路、たとえば $X \rightarrow A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow Y$ といった代替的な仕組みを立ち上げたと考えられる。それに対し、後者はSOSが発信されずバックアップのないまま、複雑なネットワークが組み立てられ、マウスは誕生する。脳の神経活動は盛んになり、新しいシナプスが形成される。おそらく、XからYへの情報伝達は、このような脳の発達と関係するとみられ、その齟齬は生まれてすぐではなく徐々に現れる。プリオンタンパク質はX情報を伝達しないままYと結合。生兵法はケガの元、中途半端は怖い！！